

## 国語教育の基本的なあり方を考える(<特集>教育・国語教育論文)

著者	山下 宏
雑誌名	日本文学誌要
巻	48
ページ	27-34
発行年	1993-12-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019689">http://hdl.handle.net/10114/00019689</a>

# 国語教育の基本的なあり方を考える

山下 宏

## 一

国語教育をはじめ教育全般の営為が、いつも、時代・社会の状況との密接な関連のなかで、またはその枠組みのなかで進められるものであることは言うまでもないだろう。明治期、日本における学制施行以来、諸制度の改革、及びそれにとまなう教育の内容・方法のたえまない刷新の跡をたどれば、そのことは歴然としている。

今回（平成元年）の学習指導要領を中心とする教育課程改訂の経緯においては、その事情が肌を通してわれわれに実感されたはずである。期日は確かでないが、平成元年前後、教育課程改訂・実施にかかわる論議が盛んだったころのことである。NHK教育テレビで数名のゲストによる当問題についての討論会が行われた。その時のゲストのひとり、立教大学総長浜田陽太郎氏の発言に、およそ次のような趣旨の一節があったことを記憶している。

現在、教育界で課題になっている「個性化」や「国際化」などは、実は教育界からではなく、まずは日本の実業界・産業界にさせまった必要から生まれたものであり、教育界ではそれを後で受けたのである。

また、たとえば「個性化」などというのは、教育の“いろは”であって、従来、忘れることなく努めてきたものである。

この発言を聞いて、時代・社会と教育との関連、その結びつきの深さに改めてうなずかされた。

このように、教育への要請はもっぱら時代の趨勢から押し寄せまってくる。また、そこでの教育の努力はそれに適応する能力を育成する点にいちずに注がれることになる。これまでの方向は概ねこれであつたと思う。

しかし、時代や社会の動向ないしは要請に適応するだけで教育の役割が果たせるであろうか。否といわなければならない。教師が設定すべき教育目標は、単なる適応ではなく、それに立脚した批判か

ら創造へ一歩突き抜けなければならない。適応・批判・創造、この三過程における第一過程においてのみ、その役割が見込まれる。またその位置において「適応」は容認される。後続段階の前提となるからである。

ちなみに、ここで現行の学習指導要領に規定される国語科の教育目標を検証してみよう。小学校の場合も大同小異であるが、中学校の場合の、学年目標ではなく総括（全体）目標である。

国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

この総括的な教科目標の記述には、キーワードというべきものが七箇ある。すなわち、「理解・表現・思考・想像・言語感覚・認識・尊重」である。これらを大別すると、いわゆる言語活動または言語運用の能力にかかわる前半四項と、その活動・運用を支える言語事項としての後半三項との二つのグループとして捉えられる。（この分類の場合、「言語感覚」と「尊重」の二項目の取り扱いが問題となるが、この点については暫く措くことにする。）

この目標と、本稿の主題である「批判・創造」との関係を考えてみると、そこに関連性があるかもしれない。記述前半の「表現」「思考」「創造」あたりにということになろう。しかしそのこと自体はいっこうに明確でない。むしろ問題は、それらの内にもしくはそれらを通して、授業の実際場面で「批判・創造」に関する観点が自覚的意図的に設けられ、実行されているかどうかということ

とである。

また、中学校国語科学習指導要領にはもう一点、教材を精選するさいの配慮事項が八項目明示されている。話題や題材の内容価値に対する観点である。八項目のうちの後半四項目のみを引用すると次のようになる。（便宜上前半四項目を割愛）

- (5) 人生についての考えを深め、豊かな人間性を養い、たくましく生きる意志を育てるのに役立つこと。
- (6) 人間、社会、自然などについての考えを深めるのに役立つこと。
- (7) 我が国の文化と伝統に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。
- (8) 広い視野から国際理解を深め、日本人としての自覚をもち、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

これらの項目中に出てくる言葉、すなわち「人生についての考えを深め、豊かな人間性を養い、たくましく生きる意志を育てる——人間、社会、自然などについての考えを深める——我が国の文化と伝統に対する関心や理解を深める——日本人としての自覚をも（つ）」等々はかなり重要である。それらの観点が学習指導の個々の目標に具体的に生かされ、それら授業で実現されるならば、基本観点としての「批判・創造」も達成の可能性をもつであろう。しかし事実はどうだろうか。大局的にはやはり、「適応」の域を出るものではないように思われてならない。

たとえば次のような状況ないしは傾向がある。中学校では各学校

の教育研究テーマを掲げてひたすら実践を進めている。「基礎基本の学力」「個性尊重」「自己教育力」「学習法の学習」「創造的な思考」その他いずれも現在の社会的な要請に対応したテーマである。もちろん、そういった時宜にかなったテーマに基づく実践研究そのものに対してとくに異議をとねえるつもりはない。けれども、中学校三箇年にわたり教師はしっかり指導し、生徒もそれなりに懸命に学習した結果はどうなるのか。極論すれば、「個性」も「創造」もない局面にともに追い込まれる、または教師としては追い込むことになっているのではないか。つまり、進学に当たって生徒たちはABCそれぞれのランクに該当するといわれる高校にふりわけられるのである。あるいは偏見を含むかもしれないが、これでは、それまでの実践や研究も水泡に帰すというものである。

時代の違いもあり、かつ境遇のゆえもあってか、私自身はついにそれに類する経験を持たなかった。が、身边では三人のわが子たちをとおしてそのようすをつぶさに観察した。間接的には大同小異、あまたの事例を見聞してきたように思う。学歴尊重の社会風潮と学校教育思想とのほさまに永続する癒しがたいほどの亀裂現象である。現場教師の誰彼と、この辺の事情をめぐって幾たびとなく話し合ったこともあるが、異口同音に「そこが何といっても一番の悩みの種だね」とこぼすばかりであった。痛みは大方感じているのである。現在、中学校での業者テストの禁止、また偏差値重視の見直しなど徐々に改善のきざしが見られるものの、根本的解決の域には遠い状況である。

周知のとおり、背景をなす学歴社会が受験競争を誘発・激化する直接の引き金になっている。受験競争は実は、明治開学以来、量と

程度の差はまちまちとしても、一貫して続いて来た事柄である。ところが、第二次大戦後、とくに昭和三十年代以後の進学率増加にもなつて、その速度は急激に高まった。それはいわゆる五十五年（昭和三十年）体制と呼応する経済主義・生産主義への国家的集中と見合うものでもあった。

そんななかで、個人的にわが子をとおして経験し、実感を抱いたひとつの事例がある。三人の子どもが順次、大学に在学したところのことである。大学から発刊され、保護者にも配布される学報類の進学年次早々の巻号には、前年度卒業生の就職状況一覧とそれについての若干のコメントが掲載される。またその一覧表にはどの大学でも例外なく、時の一流企業・金融機関等の社名、そこへの就職者数が列記される。毎年その記事を見るたびに私は一種の憤りと嘆きの感情を抑えることができなかった。その記事はいかにも「これ見よがし」の印象を与えるのであり、大学の成績誇示がその一点に集約されているかのごとくであった。

中学校・高校での最終局面が生徒のランク別進学先のふり分けであるとするならば、大学でも同様の手法で、有力企業等へいかにして多くの学生をおくり込むかに焦点が置かれている。その一本道のありようが明らかにになった。

そのような実情にふれて、私は「そんなつもりでわが子をこの大学へ入学させたはずはなかった。大学は学問の府という自尊心と權威を忘れて、時代におもねる人材セールス業になりさがったのか」という思いを深くしたのであった。

子どもの進路（進学）については、私も親としてそれなりの関心をもち、直接・間接の言動でなんらかの影響を与えてきたものと思

われる。志望が順調に達成された（あるいは達成されつつある）とはとても言えないが、一定の方向性は根づき、深まりつつあるかと察せられる。具体的には、弁護士・カウンセラー・社会福祉主事などといったところが所期の志望であった。なお、これらはいずれも要するに「弱者の立場に身を寄せ、ひとのために尽くす」職業との判断により、ひそかに納得し奨励したもののである。

受験競争というもののほど私にとっていやなものはないが、それは高校・大学への進学において著しい。大学教師のはしぐれにあるわが身の責任は「いやなもの」などといってまぬがれるわけにはいかない。だからこそ、きょうもまた教育の基本的なあり方を、私なりに考えざるをえないのである。

## 二

平成三年度に、「指導要録」に記載する評定内容が改定されたことは一歩前進である。「表現・理解の能力、言語についての知識・理解・技能」など、いわゆる認知的側面の能力に関する項目と、「国語への関心・意欲・態度」など、いわゆる情意的側面の能力に関する項目において、その軽重の観点が逆転したことである。すなわち、従来は下位に付随していた情意項目が上位に掲げられて主導権を得たのである。

情意面の指導・評価など、その取り扱いについては、不可視的あるいは計測不可能な部分が多分に含まれるため、実践上困難が大きいとされている。しかしまた、重要度・難度の大きさに比例するかのごとく、それに対する研究がとみに盛んになってきている。国語

教育の専門雑誌特集号としてもとりあげられ（たとえば『教育科学国語教育』平成五年十月号「関心・意欲を育てる『授業準備法』」、著書類も続々刊行されている）。

最近の著書としては益地憲一氏『国語科評価の実践的探究』（溪水社・平成五年七月一日発行）がある。実践をふまえて評価全体を論究したものであるが、そのうちの第Ⅱ章「国語科における情意評価」は、新課題かつ未開拓の分野に精力的に挑んで得た貴重な成果であり、そこには当該事項研究の意義・対象・方法・問題点などが詳述されている。

ちなみに、同書第Ⅱ章第六節第2項「情意評価未成熟の理由」（九七頁～一〇〇頁）のなかには、私にとって重要と思われる記述がある。その部分のみ引用させてもらおうと次のようになる。（傍線、引用者）

● 第一の理由（中略）国語科をはじめ我が国の教育全体がこれまで知識偏重・技能中心の教育であったことがあげられる。知識を注入し技能を修得させることに汲々とし、学習者の内面的活動や精神的作用に目を向けるゆとりがなかったのである。（中略）「問題解決学習」や「課題学習」においては学習の筋道を理解させ解決のしかたを学ばせることが中心であり、「創造性の教育」においてはその概念規定に力を奪われ、真の自己創造をさせ得なかったからである。

● 第二の理由（中略）国語教育においては従来から教材の内容価値にかかわる論議は盛んであり、指導における内容価値の押しつかけを忌避する考え方が大切にされてきた。とくに文学作品の主題

において、「人間はこう生きるべきである」とか「人はこうしたことをすべきではない」といった道徳的価値観を押しつける傾向が一部にあり、そうしたことに對する批判や反省が評価において価値観をとり上げ、それを敬遠させる遠因となったものと考えられる。

● 第三の理由（中略）学習者自身の感性や価値観などにかかわる学習者の内的活動までを評価することはできなかった。

● 第四の理由（中略）国語学力を支える大切な能力としての内面的精神的な情意を忘れ去ってしまう傾向を生み出しつつある（後略）

これは恣意的な部分引用であり、同書の論旨を伝えるものにはならないかもしれないが、引用中の傍線箇所の文言に注目したいのである。傍線部を整理再引用すると次のようになる。

- ・ 内面的活動や精神作用に目を向ける
- ・ 真の自己創造をさせ（る）
- ・ 教材の内容価値
- ・ 価値観を取り上げる
- ・ 感性や価値観などにかかわる学習者の内的活動
- ・ 内面的精神的な情意

著者益地氏はこれらの諸項目を情意面の指導・評価を進める上で重視されるものようであり、私もまったく同感である。つまり、価値観を敬遠するのではなく積極的に取り上げ、その指導法を工夫することで学習者の内面的精神活動を啓発し、価値ある生活の創造をねらう。益地氏のことばに倣うならば、私もこう言いたいのである。

ところで「価値」とは何だろうか。多面多層的なものと考えられるが、しかし整理し一括して表示することは不可能であろう。衆論によって時々での最善の価値を発見してゆかなければならない。たとえば田近海一氏がまとめておられる国語教育の今日的課題八項目は、ひとつの有力な参考資料たりうる。それは次のようなものである。

①基礎・基本の重視（学力保障）

言語および言語活動に関する基礎・基本の学習を充実させ、「国語」学力を保障する。

②個別学習と個性尊重

個に応じた学習を通して、個性を生かし、一人一人の能力を育てる。

③生涯教育と自己学習能力

生涯教育を視野に入れ、その基本となる学習意欲や自己学習能力、さらには相互啓発の能力を育てる。

④創造的な思考力・創造力・表現力

社会の変化に主体的・創造的に対応できるよう、思考力・創造力および表現力を育てる。

⑤情緒処理能力

情報化社会に応じ、多様な情報を収集・整理し、さらに加工・再構成して表現する能力を育てる。

⑥国際社会と伝統・文化の継承

国際化時代に生きる基礎として、日本語はもとよりのこと、わが国の文化・伝統への理解を深める。

### ⑦他者理解・異文化理解

異文化理解をも視野に入れ、価値観の多様化の時代において、自分とは違う立場の人間（異質なる他者）を理解する能力を育てる。

### ⑧人権意識と思いやり

人間的な言語生活の基盤として、人権意識と他者への思いやり（人間愛）、相互理解の能力を育てる。

（有精堂『新中学校高等学校国語科教育法概論』二二―二二

頁・平成二年一月二十五日発行）

右に引用のうち、⑦および⑧の項目が最も大切なものと私は受けとめる。「価値」ないしは関心・意欲につながる実体という観点からである。とくに「他者理解」「思いやり」を重視したい。このふたつは現代日本に極度に欠けていたものであると同時に、人間生活にとって最重要のものである。これを価値として、われわれ自身の追求課題にしなければならない。子どもたちの学習課題の中心にもすえなければならない。これは「適応」などで獲得できるものではない。決してない。

## 三

子どもに限らずだれでも、関心や意欲があってはじめて、ものごとの発見・追求・成就が可能となる。多分、人間のあり方には大別して二種があり、関心・意欲のもてる場合ともてない場合とに分けられる。その人がいずれの場合に置かれるかは、対象・価値観など

によって決まり、その状況はまた常に、変化し、ゆれ動く構造の中に置かれているといえそうである。つまり、関心・意欲というわくぐみから見れば、だれもが大なり小なり無常変易のなかで暮らしているのである。

人間は、願望としては、もちろん、ものごとを発見したり成就したりするという生き方を選ぶし、選びたがっている。そこにこそ生きる真の意味が見出されるからである。学校教育における諸々の営みも例外なく、その路線上で行われなければならないし、実際、行われようとしているものと思われる。

まえにもふれたが、子どもにおける「関心・意欲」は、昨今、教育上の焦眉の課題になっている。この時に当たって、まずはじめにひとつ押さえておくべきポイントがあるのであるのではないかと思う。そこには二面があるということである。すなわち、最初から子どもの内部に関心・意欲なるものが備わっていて、それを生かし伸ばす面と、もうひとつ、子どもの外部（とくに教師）からの刺激・示唆・指南など何らかの啓発手段によって子どもの側に関心や意欲を生成させる面とである。前者が一般的かつ基本的なものとしてまず認められるだろう。そのためか、教育者のあいだにはとにかくその本来具備の面にとらわれすぎているきらいがあるように感じられる。子どもの意欲・関心をだいいじにして、それを受け入れ伸ばしてやるべきだと。しかし、現在もっと必要なのは後者、教師のはたらきかけによって新たに生成されるはずのそれではなからうか。子どもかわいさから眼がくもり、気力がぶっつては困るのである。

この点で、たとえば安居總子氏の「学習者の興味・関心・必要は育てるものである」ということは、最近とくに傾聴すべき一例で

あった。(東洋館『ことばの学び手を育てる国語単元学習の新展開 V』二三頁・平成四年八月二十五日発行)

さて、最後に、いままで述べてきた「批判・創造」の観点にそった教材として設定が可能と思われる文学作品のひとつを紹介し、あわせてその趣旨にもふれておきたい。

その事例は斎藤隆介の民話作品「三コ」である。この作品は教科書教材ではない。ただし、平成元年十一月に長野県中野市立中野小学校第四学年(阿部恵子教諭)で教材として取り扱われ、相当の成果をあげた例がある。

作品「三コ」の梗概を、阿部氏作成の学習指導案から借用すると次のようになる。(指導案では「主題」となっている)

水のみ百姓の小セガレとして生まれた三コは、貧しく窮屈な生活にしんぼうでなくなつて、家をとび出し、秋田じゅうをかけたまわっているうちに、いつしか、困っている人々の願いをかなえてやる存在に変わっていった。そんな三コが、オンチャたちのために木を植え、いっしょに育てた、オイダラ山の火事を目の前にして、「秋田の国じゅう火の海だァ……。」というじいさま百姓のうめきを聞いた。「ナァーニ、そんなことさせてたまるかァ!」ニコツとわらつて、「みんな。オンチャがた。マメでくらせエ!」という言葉を残して、山に身を投じ、火事をくいとめたのだった。この極限の状況下での選択は、三コの喜びですらあった。

オンチャたちのためにオイダラ山を守つただけでなく、秋田の国を救うためにとつた三コの勇敢な行動は、人々の嘆きを感じるやさしさと「三コの仕事」を通して大きく育った魂によっておこ

されたものであった。

この作品は民話(創作)なので、それに応じた表現叙述が用いられていることはもちろんだが、それに加えて斎藤隆介流の語彙・語法がふんだんにちりばめられている。たとえば、躍動感に満ちた副詞、「ワッシ、ワッシ」「ユサンユサン」「ホカホカ」「コロコロ」「ゾウゾウ」その他、一〇種ほど。複合語の多用、「かけはじめ」「しばらくつける」「ふきなびかす」「思いあまる」「ひんぬく」「見ひらく」「ふみとどろかす」「だきすくめる」「にえただれる」「立ちのぼる」その他、三〇種ほど。ユニークな比喻法、「ホウズキほど」「死んだ魚の目玉のように」「ほのおのタテガミ」その他、六種ほど。ほんの一部の指摘にとどめるが、これらをとおして、読解の過程でたくさん語彙・語法の学習が期待できる。また、作品構成については、冒頭場面(「風にのる三コ」)での、対比による全体事象の客観的把握・証明、作品総体にわたる事件の段階的盛り上げ・展開など、文章組み立ての特徴を学ばせるみちすじも見通される。ともかく、語彙・文体・文章など、言語の用法について考えさせる材料がきわめて豊富な作品である。

内容的には、主人公三コの勇敢で劇的な生き方に子どもたちが引きつけられ、一気に読み進めたい気持ちにかりたてられることは、まず保証される。ところが、子どもたちが文学作品に接するとき、とかく話の筋立てのほうに関心がむきやすく、ひとつひとつの叙述の意味やあじわいが十分に汲み取られないで終わることが多い。だから、この部分をきめこまかく丁寧に扱うことが、文学の鑑賞・読解での一大眼目になる。文学における思想なり主題なりは、すべてこ



の叙述のありように規定されているので、学習指導での叙述表現の吟味・検討をなによりも尊重したい。

作品「三コ」の内容面での基本的な教材価値は、たとえば次のように捉えることができる。日本が経済上の繁栄を極度に達成したいま、それに代わる新しくて確かな価値・理想を、まだ発見しえないところで迷っている。理想（人間としての生き方）を何に求めたらよいのか。そのとき、この作品はわれわれにひとつの大きな示唆を与えてくれる。困っている人々、その嘆きを感じとるやさしさ、わが身を投げうって人々のために役立つ、しかも、それを喜びとして受けとめさえする——そのような三コという人物の生き方に、作品形象のなかで直接出会うことができる。

このような作品内容そのものに向けて、子どもたちの関心や興味を誘い込み、意欲をもってその意味合いを感受させるような教師自身の日、力量がほしいと思う。

教材開発の視点・方法はさまざまあるが、そのひとつとして、私がこのごろ特に意をとどめているのは、右にも述べてきたような、子どもたちの将来に期待される人間像、そのビジョンに焦点をあてて、教材内容を設定するという方法である。言語能力を高め伸ばすとはどういうことなのか。何のための言語能力なのか。素朴にすぎると言われかねないこの問いから、実は、いま、出直す必要があるように思われる。

そのためにこそわれわれは、子どもをとりまく現環境の実相を熟視し、その本質の何たるかを判断しなければならない。また同時に、そこにうごめきはためく子どもたちの志向——関心・意欲のありようをよりの確にとらえ、それに対して積極的にはたらきかけなければならぬ。

ればならない。

経済的視野に基づく立身出世、自分の利益第一主義の動きが瀾漫している。時代は徐々に変化しつつあるが、大局的变化はまだ見られない現在である。

教師は時代に対しては厳格に立ち向かい、そこで得たものを糧にむしろやわらかく子どもに手をさしのべるべきである。最初から子どもにあまり厳しく接するのは適切ではない。子どもは時代の子どものだから——。先見の明をもった愛のことばを息ながく施すのがわれわれの使命というものである。

付託 本稿中第三節の付記は、雑誌『授業創造』第六号（平成五年十二月一日発行・光文書院）に発表の「子どもの関心・意欲を生かして言語能力を高める教材研究——文学教材の表現・叙述」と、修訂は加えてあるものの、重複していることをお断りする。

（やました ひろし・一九六四年修士課程修了・信州大学教授）